様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：６２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００９７４

研究課題名（和文）実証的地名研究と地名の歴史資料化―カリヤドとは何か―

研究課題名（英文）Empirical research on place names and making them historical materials: what is Kariyado?

研究代表者
青山　宏夫（AOYAMA, Hiro'o）

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・名誉教授

研究者番号：００１６７２２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：東日本の120万件以上の小字地名を文献によって調査した結果、カリヤドという地名が47件確認され、それらが太平洋側に分布していることが判明した。また、関東地方東部におけるカリヤド地名を詳細に現地調査したところ、それらは河川などの近くに位置するものの洪水の影響を比較的うけにくいより標高の高い地点に立地すること、中世の幹線道路の渡河点に立地することが判明した。これまでの研究成果も踏まえれば、これによって、カリヤド地名が中世日本における道の復元や景観を理解するうえで有効な資料の一つであることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
地名は、その解釈がしばしば恣意的となるため、これまで歴史研究においてあまり有効な資料として取り扱われることはなかった。しかし、文献資料などの常用の資料に比べて、地名は各地に遍在しているため、確実な歴史資料として利用できるようになれば、歴史の研究視角が広がり、また身近な資料として地域の歴史文化の研究と理解の促進に寄与することができる。本研究では、その一例としてこれまで注目されることのなかったカリヤドという地名をとりあげて、東日本一帯における分布調査と関東地方東部における詳細な現地調査によってその有効性を実証し、確かな歴史資料としての地名を新たに提案した。

研究成果の概要（英文）：A literature survey of more than 1.2 million place names of koaza, a subsection of a town or a village, in eastern Japan confirmed forty-seven place names called Kariyado, and revealed that they are distributed on the Pacific side. In addition, a detailed field survey of place names called Kariyado in the eastern Kanto region revealed that they are located near rivers but at higher elevations that are relatively less affected by floods, and that they are located at river crossing points of medieval arterial roads. Considering the research results to date, this study has revealed that place name called Kariyado is one of the effective materials for the restoration of roads and understanding of landscapes in medieval Japan.

研究分野：地理学

キーワード：地名　道　川　渡河　鎌倉街道　中世　歴史地理学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

地名は、人々が長い歴史のなかでその認識に基づいて土地を分節化し、その自然的特徴・社会的機能・歴史的経緯などに応じてそこに与えた呼称である。そのため、地名はしばしば歴史資料として利用され、時には土地の履歴の語り部として防災意識の啓発や普及にも利用されている。

しかし、地名とそれが意味する事象との関係について、実証的な手続きを経ずに恣意的な解釈のまま利用されている場合も少なくない。たとえば、地名の成り立ちや指し示す範囲、その変遷などについて確かな検証を経ないままに、地名と地盤災害とを安易に結びつける例も散見される。地名が先人の残した貴重な歴史遺産であることに注目し、それが有する多様なメッセージを受けとめて、歴史研究や地域文化の理解促進、さらにはわれわれの生活の実際に資するためには、地名とそれが意味する事象との関係について実証的に研究することが欠かせない。

また、歴史研究では、文献・古地図・絵画等の書（描）かれた資料のほか、様々な作られたモノ資料や伝承・伝説等の語られた資料、さらには地形・遺跡・地割・地名等の現地資料など、多様な資料が利用される。このうち地形や地名などは、その他の資料と比べて遍在している。地名が歴史資料として利用可能になれば、偏在する資料を補い、さらに歴史の研究視角を拡張する可能性がある。

２．研究の目的

本研究は、実証的な地名研究を提示し、確かな歴史資料を獲得することを目的とする。そのために、地名が指し示す空間の自然的特徴・社会的機能・歴史的経緯に注意しながら、カリヤドという地名を事例として、それらの個別的検討と全国的な比較によってその意味を追求する。

これまでの研究（青山宏夫「地名『カリヤド』と渡河の景観―関東の事例から―」〔金田章裕編『景観史と歴史地理学』吉川弘文館、2018〕および同「東北地方のカリヤドという地名―中世の道と渡河―」〔史林 102-5，2019〕）によれば、関東地方および東北地方では、カリヤドという地名は中世の幹線道路が河川を渡る地点に立地していると指摘されている。このことを全国的に検証し、中世日本における渡河のあり方や交通路の復元はもとより、交通ネットワークを基盤とする国家や地域社会を理解するための独自の資料を獲得する。

３．研究の方法

(1)　計画段階では現地調査を中心に実施する予定であったが、開始時から研究期間のほとんどを通じて新型コロナウイルス感染症拡大に留意すべき状況であったことから、文献調査やオンライン上で利用できる資料等を積極的に活用することとした。

(2)　カリヤド地名の分布を網羅的に把握する必要から、これまでの研究でその分布が明らかになっている東日本について、『角川日本地名大辞典』に掲載されている小字一覧を精査してカリヤド地名を抽出した。また、自治体史等に掲載された小字地名なども適宜活用した。

(3)　カリヤド地名がいかなる地形条件にあり、いかなる交通路上の位置を占め、いかなる諸施設が立地していたか、そこが当該地域においていかなる機能を果たしてきたかなどについて、研究代表者から比較的近距離にある事例を中心に歴史地理学的方法により現地調査した。その際、地形・地割・地名（小字、通称地名など）・古道・史跡等の調査や伝説・伝承等の調査を実施した。

(4)　個々のカリヤド地名の調査にあたっては、オンラインで利用可能な空中写真や古地図類、文献類を活用したほか、各地の資料館・図書館等において地名関係及び地域史関係の文献・史資料を調査・収集した。

(5)　個々に検討された事例を相互に比較し、それらに共通する特徴を抽出した。これによって、これまでに指摘されているカリヤド地名の 3 点の特徴、すなわち①河川に向かって舌状に突き出た台地や微高地に位置すること、②交通路とくに古代や中世の幹線道路が通過すること、③渡河点にあたっていることについて検証した。

４．研究成果

(1)　『角川日本地名大辞典』に掲載された小字一覧によって、カリヤドに関係する地名の抽出と存否を確認した。具体的には東日本の 31 都県の小字を精査し、岩手県で 2 例、宮城県で 1 例、福島県で 7 例、茨城県で 4 例、栃木県で 4 例、群馬県で 2 例、千葉県で 2 例、埼玉県で 2 例、東京都で 1 例、神奈川県で 4 例、山梨県で 1 例、長野県で 5 例、静岡県で 5 例、岐阜県で 5 例、三重県で 2 例の、合計 47 例の関係地名を検出した。

このうち、茨城県常総市崎房字借宿（以下、常総借宿）、千葉県市原市新堀字苅宿（以下、市原苅宿）、静岡県御前崎市白羽字借宿（以下、御前崎借宿）は、これまでの研究では知られてい

ない新出事例である。また、カリヤド地名の分布については、それが太平洋側で検出されるのに対して、日本海側では検出されないことを確認できた。限られた文献調査とはいえ、31 都県にわたる広域において 120 万件以上の小字地名を対象とした調査結果であり、いずれも高い信頼性を有するものと判断できる。

(2)　新出事例のうち市原苅宿については、2023 年 5 月 20 日の歴史地理学会大会において発表した（タイトル「上総国の交通と中世新堀郷―カリヤド地名とその周辺―」）。その内容は以下のとおりである。

カリヤド地名については、これまでに、①主に東海・関東甲信・東北南部に分布し、②河川に面した台地や微高地などにあり、③道とくに中世の幹線道路と関連し、④渡河点に立地するものが多いことなどを指摘した（地名「カリヤド」と渡河の景観―関東の事例から―〔金田章裕編『景観史と歴史地理学』吉川弘文館、 2018〕、東北地方のカリヤドという地名―中世の道と渡河―〔史林 102-5，2019〕）。本報告では、その後に検出された市原市新堀字苅宿を対象として、如上の指摘を検証するとともに、その過程で明らかになった上総国の交通とくに道、中世新堀郷、それとカリヤド地名との関係について、以下のように指摘した。

市原の苅宿は、養老川に近く、洪水の影響を受けにくい更新世段丘上にあって、鎌倉・上総国中心域・東上総の３方面に通じる幹線道路の三叉路すなわちみつまたにあたり、かつ鎌倉街道の養老川渡河点であることが明らかになった。そして、その三叉路にあたる地点に「みつまた」という小字が現在も残り、かつその地名は 13 世紀半ばにまで遡れることが判明した。これらのことは、これまで検討してきた事例と矛盾せず、これまでの指摘を検証することができたことになる。

交通に関しては、カリヤド地名によって、従来は別々に考えられていた鎌倉街道と国府近くで発掘された古代中世の道路跡とを接続させることができた。また、鎌倉街道から荻原野遺跡付近で分岐し、海上郡家推定地の小折、養老川渡河点の字神宿を経て、上総国中心域に至る古代道についても指摘した。これらにより、上総国の交通網の一端をとらえることができた。

新堀郷は中世史などでは有名であるが、その成立経緯は未検討である。そこで、地理学的な観点から検討した。その結果、現在の新堀川は人工的に付替えられたことが判明し、それを用排水路とすることで新堀郷が成立したと推定した。郷名自体も、新たに開いた堀による成立であることを示しているとみられる。このように新堀郷が開発されるに至るのは、鎌倉や国内各地に通じる水陸交通の要衝であり、年貢輸送や領地経営などに利点を備えていたことが作用したためと考えられる。

また、新堀郷には「鋳物師免」「猿楽師給」が設定され、鋳造関連遺物が出土するなど活動拠点の徴証もある。これらの「道々の輩」は「遍歴する職人」ともいわれ、各地を遍歴して自らの「芸能」によって生業を立てていた。新堀郷を一つの拠点としつつも、各地を遍歴する彼らにとって、新堀郷の交通条件は好適であったに違いない。

以上のように、交通の要衝であることが新堀郷の開発を促し、またそれによって成立した新堀郷には、それに依拠した社会構成が備わるに至ったと考えられる。

最後に、このようなカリヤドの景観は、『更級日記』における天竜川や『一遍上人絵伝』における富士川の場面の描写にみられることを指摘した。

(3)　市原苅宿のほか、その近くに位置する常総借宿および千葉・茨城両県内の既知の 4 事例すべてについて現地調査を実施した。常総借宿は近世に干拓される飯沼・入沼岸の台地端にあり、古代中世と推定される道が入沼を渡る地点に位置する。その他の 4 事例も同様の自然条件と交通条件を有している。これにより、カリヤド地名は河川等に臨む台地等にあって中世の幹線道路の渡河点に位置するという仮説を検証することができた。中世の道を復元する資料としてのカリヤド地名の有効性が明らかになった。

(4)　もう１つの新出事例である御前崎借宿は、中西川右岸に面する段丘上にあって、対岸の段丘・丘陵と向き合って中西川の狭隘部を形成する位置にある。これまでの研究で指摘した、河川に向かって突き出た台地や微高地に位置するというカリヤド地名の地形的特徴を、御前崎借宿も有していることがわかった。また、当地の背後に続く丘陵には古代の官営の牧である「白羽官牧」があり、中西川対岸の段丘上には式内社にも比定される白羽神社があることから、古くから

交通路があったことが想定される。これらの点を踏まえると、御前崎借宿は地形的にも歴史的にも中西川の渡河点であった可能性が高く、これまでの研究で指摘してきたカリヤド地名の特徴と一致することが明らかになった。

(5)　比較のために、カリヤド地名のなかでは西方に位置する三重県東員町大木字上仮宿・字下仮宿・字南仮宿（以下、東員仮宿）を現地調査した。当地は、員弁川左支流の戸上川（茶屋川）左岸の更新世段丘端に位置する。そこは、台地が川に向かってやや張り出した地点であり、対岸の更新世段丘と向き合って、戸上川河川敷の狭隘部を形成する。これまでの事例で指摘した、河川に向かって突き出た台地や微高地に位置するというカリヤド地名の地形的特徴を、この東員仮宿も有していることがわかった。また、東員仮宿は、美濃・近江・桑名へ至る幹線道路の濃州道に沿いで、その戸上川の渡河点にもあたる（現在は茶屋橋が架かる）。これらの点を踏まえると、東員仮宿は地形的にみても交通路の点からみても、これまでの研究で指摘してきたカリヤド地名の特徴と一致することが明らかになった。

(6)　以上のように、地名が中世の道を考察するための確かな資料として利用できるようになったことで、これまでの中世の道に関する研究を補い、さらに新たな研究視角や新知見をうる可能性がひらかれた。また、カリヤド地名に注目することで、これまで知られていなかった中世の道の発見や再認識に至る場合もある。さらに、中世の道の景観とくに渡河点における景観とその機能などの再検討や、それに関連して中世の絵画資料の読解の見直しも必要となる。

(7)　本研究では関東地方における事例の検討を中心としたが、今後、カリヤド地名の分布域におけるもう１つの密集地域である東海・甲信地方の検討が求められる。その場合、関東・東北においてカリヤド地名が鎌倉街道や奥大道と関連する点を踏まえて、幹線道路に留意することが重要である。また、渡河点の地名に関しては、カリヤド地名以外に「タンガ」「フセヤ」「マルコ」地名などが指摘されている。これらの地名との比較検討により、それら相互の異同や渡河点における景観と機能を解明していくことも次なる課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 青山宏夫
２．発表標題 上総国の交通と中世新堀郷―カリヤド地名とその周辺―
３．学会等名 歴史地理学会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関